

「キャンパスアジア・プログラム」の現状 -神戸大学における取り組みから-

神戸大学大学院国際協力研究科特命助教 田中 悟

TANAKA Satoru

キーワード： キャンパスアジア、専門家養成、大学間交流、
ダブルディグリー、交換留学

1. プログラムの概要とその目的

「キャンパスアジア・プログラム」は、平成21(2009)年10月10日の第2回日中韓サミットで日本側の提案した「東アジア地域における大学間交流」に始まる。その提案が、「CAMPUS Asia (Collective Action for Mobility Program of University Students in Asia)」構想へと発展し、文部科学省の「平成23年度大学の世界展開力強化事業」の中で、「キャンパスアジア中核拠点形成支援」として結実した。

「東アジアにおけるリスク・マネジメント専門家養成プログラム」は、神戸大学大学院国際協力研究科(GSIGS)と復旦大学国際関係・公共事務学院(SIRPA、中国)、高麗大学校国際大学院(GSIS、韓国)が上記事業に共同申請し、「タイプA-I(日中韓のトライアングル交流事業)」に採択されたものである¹。

本プログラムでは、神戸大学・復旦大学・高麗大学校という日中韓の3ヶ国3大学がコンソーシアムを構成し、3大学が擁する大学院での教育を通して「東アジアにおけるリスク・マネジメント専門家」を養成することを目的とする。具体的には、現在の各大学院のカリキュラムをレビューして、新しいカリキュラムを3大学院間で構築することにより、①自然災害時のみならず経済危機、社会情勢危機時における、リスク・マネジメントに関わる応用力のある専門的な知識とスキル、②日本・中国・韓国に関する政治・経済・人的資源開発・開発運営を含む社会科学全般の専門性、③本国語に加えて英語と現地語による政策・実施支援ができるレベルのコミュニケーションスキルを習得して、④異文



復旦大学 国際関係・公共事務学院



高麗大学校 国際大学院

¹ 詳細については、下記のサイトページを参照されたい。

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1312826.htm

化を理解した上で、公共機関や国際機関、NPO などにおいて世界の危機時における問題の分析、政策策定を主導し、さらに災害の現場で活躍できる専門家の養成を目的としている。

2. プログラムのデザイン

本コンソーシアムを形成する復旦大学国際関係・公共事務学院は、中国における国際関係教育の拠点の一つであり、本プログラムにおいては日中関係をはじめとする東アジアの国際関係および中国の政治・社会・経済・言語に関わる教育の機会を提供している。また、韓国有数の名門私学として知られる高麗大学校の国際大学院は、英語で教育を行なう大学院である。こちらは、安全保障や韓国情勢、および政治政策的・経済的危機時におけるリスク・マネジメントに関する研究とインターンシップの機会を提供することができる、韓国屈指の教育研究機関である。

両大学院および日本の神戸大学大学院国際協力研究科はいずれも英語コースもしくは英語教育プログラムを有しており、各大学から派遣される学生はそれぞれ受け入れ先大学院において英語で開講される講義を受講し、単位を取得する。さらにダブルディグリー・プログラムに基づいて派遣されている学生については、英語で修士論文を執筆し、それぞれの大学での審査を経て、学位を取得することになる²。

本プログラムの実施に当たっては、博士前期課程の大学院生を対象に、神戸大―復旦大―高麗大において相互に実施する交換留学（派遣期間：6ヶ月／12ヶ月）およびダブルディグリー・プログラム（派遣期間：12ヶ月）の派遣・受け入れのための協定が3大学間において締結されている。この協定のもとで、3大学は、単位認定および学位授与などに関するシステムを整備し、学生の相互派遣を通じたリスク・マネジメント専門家養成コースのモデルを確立することを目指している。

〈表1〉本プログラムにおける各大学院の特色

神戸大学 大学院国際協力研究科（日本・神戸市）
<ul style="list-style-type: none"> ➤ 海外援助に関する日本の豊富な経験に根ざした、救援活動に関わる専門家教育 ➤ 1995年1月17日の阪神大震災以降に蓄積された、自然災害や防災に関わるリスク・マネジメント教育
復旦大学 国際関係・公共事務学院（中国・上海市）
<ul style="list-style-type: none"> ➤ 公共政策大学院の特色を生かした、公共政策学・行政学の視点からのリスク・マネジメント教育 ➤ 地域大国である中国を組み込んだ東アジア国際関係や、地域的な将来構想に関わるリスク分析
高麗大学校 国際大学院（韓国・ソウル市）
<ul style="list-style-type: none"> ➤ 東アジアのクロスロードに位置する朝鮮半島の利点を生かした、安全保障に関わるリスク分析 ➤ 原子力などエネルギー問題に関わるリスク・マネジメント教育

² 本プログラムにおいては、ダブルディグリーの取得を目指す学生は、所属する大学と留学先の大学で、それぞれ修士論文を執筆することが必要条件となっている。

本プログラムは、東アジア、さらには世界レベルで活躍するリスク・マネジメント専門家——種々の危機的事態に関わる「リスク」を分析して政策策定を主導し、災害の現場でも活躍できる専門家——養成を目指すものである。この人材育成目標を現実化するため、コンソーシアムを形成する三大学院は、〈表1〉の通りにそれぞれの特性に応じて担うべき役割を分担しており、本プログラムに参加する学生は、各人の問題意識に沿ってこの3大学院における教育を組み合わせ、専門性を持つグローバル人材として活躍するためのキャリアデザインを行なっている。

3. 学生派遣・受け入れの実績

さて、このように設計されたプログラムで、実際にどれほどの学生が派遣され、受け入れられているのか。この点については、〈表2〉を参照されたい。平成24年度には6名の派遣学生（復旦大学へ3名、高麗大学校へ3名）を送り出し、8名の留学生（復旦大学から3名、高麗大学校から5名）を受け入れた。さらに平成25年度には9名の派遣学生（復旦大学へ4名、高麗大学校へ5名）を送り出し、10名の留学生（復旦大学から5名、高麗大学校から5名）を受け入れている。

〈表2〉神戸大学における派遣・受け入れ状況

■平成24年度

派遣	人数	内訳	受け入れ	人数	内訳
神戸大学 →復旦大学	3名	DD：2名 交換〔12ヶ月〕：1名	復旦大学 →神戸大学	3名	DD：3名
神戸大学 →高麗大学校	3名	DD：2名 交換〔6ヶ月〕：1名	高麗大学校 →神戸大学	5名	DD：1名 交換〔半年〕：4名

■平成25年度

派遣	人数	内訳	受け入れ	人数	内訳
神戸大学 →復旦大学	4名	DD：2名 交換〔6ヶ月〕：2名	復旦大学 →神戸大学	5名	DD：2名 交換〔6ヶ月〕：3名
神戸大学 →高麗大学校	5名	DD：2名 交換〔6ヶ月〕：2名 交換〔12ヶ月〕：1名	高麗大学校 →神戸大学	5名	DD：3名 交換〔半年〕：2名

注：「DD」はダブルディグリー学生（派遣期間：12ヶ月）、「交換」は交換留学生を指す。

なお、平成23年度にも、神戸大学から高麗大学校へ交換留学生〔6ヶ月〕を1名派遣している。

こうした派遣・受け入れ実績において特筆されるべき点の第一は、ダブルディグリー協定³に基づいて12ヶ月の留学で学位の取得を目指す、「ダブルディグリー学生」の多さであろう。平成24年度派遣・受け入れのダブルディグリー取得を目指す学生（派

³ 本プログラムでは、平成24年度中に3大学院間で相互に締結済みである。



研究報告を行なった日中韓の学生たち
(於：高麗大学校、2013年11月)

遣：復旦大学2名・高麗大学校2名、
受け入れ：復旦大学3名・高麗大学校
1名)については既にそれぞれ留学先
の大学に修士論文を提出して学位を授
与されており、平成25年度派遣・受け
入れの学生(派遣：復旦大学2名・高
麗大学校2名、受け入れ：復旦大学2
名・高麗大学校3名)についても、そ
れぞれの大学で目下、学位取得を目指
して留学生活を送っている。

これだけの人数の学生がダブルディ
グリーを取得できる背景には、本プログラムに関わる3大学の各部局(神戸大学大学
院国際協力研究科〔GSICS〕、復旦大学国際関係・公共事務学院〔SIRPA〕、高麗大学校
国際大学院〔GSIS〕)における留学生の受け入れなどの実績の豊富さがある。

平成14(2002)年に設置された神戸大学GSICS英語コースは現在、在籍者の50%
を占める規模となっている。加えて、本プログラム実施以前の段階で既に、神戸大学
GSICSは、アメリカのピッツバーグ大学、イギリスのイーストアングリア大学・ロン
ドン大学東洋アフリカ学院(SOAS)・サセックス大学、韓国のソウル大学校国際大学院
といった各大学との間でダブルディグリー協定を締結していた。また、プログラム上
のパートナーである復旦大学SIRPAの英語コース設置は平成18(2006)年であるが、
フランス・パリ政治学院(SciencesPo)やスウェーデン・ルンド大学(Lund University)
などとの間でダブルディグリー・プログラムを実施してきた実績が既にある。さらに、
平成3(1991)年に設置された英語大学院である高麗大学校GSISは、アメリカ・アメ
リカン大学との間でダブルディグリー・プログラムを実施してきた実績を有している。
このように留学生に対する研究指導のノウハウと実績とを有する3ヶ国の3大学院が
提携することによって、毎年相当数の留学生がダブルディグリーの取得を目指して研
究指導を受け、単位の取得と論文執筆に勤しむことのできる体制が整えられたと言え
る。

4. 留学生の生活と学習の実態——特に語学面について

かくして、本プログラムを通じて日中韓の3大学から派遣された学生が、現在も留
学先となっている各大学院において勉学に勤しんでいるわけであるが、彼らはどのよ
うな学生であり、留学先でどのような生活を送っているのだろうか。言及すべきこ
とは数多くあるのだが、ここではもっぱら語学面に絞って言及することとしたい。

大前提としてまずあるのは、本プログラムは日中韓の3大学によるコンソーシアム
であるが、教育については各大学とも基本的に英語で行なわれることになっている、
ということである。中国に留学する学生も、韓国に留学する学生も、そして日本に留
学でやってくる学生も、留学先で受ける授業の使用言語は英語であり、修士論文も英
語で執筆することになる。

このように、東アジアという非英語圏において英語を共通言語に設定した学生相互

派遣プログラムのメリットについて述べておきたい。それはすなわち、(1) (英語ができれば) 語学面での負担が小さい、(2) 「リスク・マネジメント」という観点から、英語という共通言語を介することで、これまで現地語や地域に関心をもつ学生に限定されていた留学機会が拡大することになった、といった点である。(1)については、少なくとも講義受講・単位取得・論文執筆といった場面においては、語学面で英語のみに集中することを可能とする。それはつまり、非英語圏への留学にはしばしば付きものの、「現地語+英語」という言語的な二重負担の免除を意味する。こうした負担軽減は、特にダブルディグリー・プログラムによって留学先で1年での学位取得を目指すとき、学生にとっては切実な問題になってくる。また、(2)については、東アジアを背景としつつも、グローバルに活躍するリスク・マネジメント専門家の養成を目指す本プログラムの性質上、日中韓の各国に地域研究的な関心を持つ者にとどまらない広い層から学生を募集することが求められる。事実、過去に神戸大学から派遣した学生の中には、中国や韓国に関心を持つ者もいたが、アフリカや東南アジアに研究上のフィールドを持つ者や、必ずしも地域にとらわれない研究関心を持つ者もいた。このような実態を踏まえれば、リスク・マネジメントを切り口として、多様な関心を持つ学生に広く門戸を開くためには、英語での学習環境の確保はある意味で必要条件だと言えるかも知れない。

東アジアというフィールドを舞台にして「リスク・マネジメント専門家養成」を掲げる本プログラムでは、講義や論文執筆指導については英語で行なう一方で、現地の言語を学習する機会の提供については、各大学ともプログラム発足当初から重視して、その充実を図っている。神戸大学においては、受け入れ学生に対する日本語の事前学習講座の設置や、留学生センターにおける日本語学習プログラムの活用などを進めており、学生の関心や学習意欲も非常に高いものがある。また、学生自身の意識として



「東北スタディツアー」に参加した学生たち
(於：大船渡消防署、2013年3月)



神戸大学からの派遣学生とともに
(於：復旦大学、2012年9月)

も、仮に留学先の事象が研究の対象でない場合でも、いわば「補助線」として現地の事例を取り入れ、自身の研究に生かしていこうという志向は比較的強い。中には、留学先でのインターシップやフィールドワークを自ら希望して行なう学生もいる。

さらに、ダブルディグリーを目指す学生と違い、留学先で学位論文を執筆する必要がないなど、負担が比較的軽い交換留学生の間では、その条件を最大限に生かすべく、専門講義と並行し

て語学学習にも重点を置いた学習計画を自主的に組むことで、留学期間中に目覚しい語学力向上を果たす者も少なくない。

したがって、与えられた条件のもとで、プログラムが準備した学習機会を積極的かつ最大限に生かしていこうという意欲にあふれた優秀な学生に恵まれていることと、そうした学生の期待に応えようというプログラム関連教員による日々の努力との循環作用によって、本プログラムは3ヶ国にまたがる学生の相互派遣プログラムとして機能していると言えよう。

5. プログラム運営のヒントとしての多言語状況

紙幅も限られているので、最後に、プログラムの運営についてのヒントとして、前節で触れた語学面について、別の角度から取り上げてみたい。

本プログラムにおいて講義や学生指導を担当する3大学の教員のほとんどは、欧米圏への留学を経験しており、海外で学位を取得した者も多い。また、本プログラムに参加する学生には、海外での活動が期待される就職を希望する者も多く、おおむね英語講義の受講や英語での論文執筆に意欲的な学生が集まっている。

ただし、そうは言っても、英語圏出身のネイティブでもない限り、英語のみでのコミュニケーションは多少のストレスがたまるものである。いかに流暢に英語を操り、意思の疎通が可能であるとしても、留学生活上の日常的トラブルについての細かな相談であったり、大学間における事務的な細かい交渉事であったりといった場面では、英語ではニュアンスが伝えきれない、もしくは伝えるのに時間と手間がかかる、といったことも起こる。

この点において本プログラムは、英語に堪能な教員とともに、中韓の大学・大学院に在籍経験のある中韓ダブルネイティブの教員を、プログラムの運営を担当する「キャンパスアジア室」スタッフとして配置し、来日前から帰国に至るまでの間、受け入れ学生に対する細やかなケアを行なうとともに、提携大学との事務連絡や交渉事を相手の言語で（英語を経由することなく）日常的に行なっている⁴。さらに、プログラム担当教員・職員が3国間を往来し、相手方のスタッフや学生と面と向かって直接話し合う機会を可能な限り確保することで、人間的な相互信頼関係を構築し、円滑なコミュニケーションを実現している。

プログラム運営におけるこのような「多言語状況」は、異国・異文化のもとで学ぶ留学生たちに安心感を与えるだけではない。神戸大学においては、英語以外の言語への関心を学生に喚起する効果も認められており、キャンパスアジア・プログラムの学生だけでなく、他の学生の中国語・韓国語、さらには日本語への関心も高まっている。これは必ずしも初めから計画的に構築された環境ではなく、これまでの活動の中で自然に築き上げられたものである。ただ、英語プログラムでありつつも、日常的に多言語を駆使して「各々が使える言語を駆使してコミュニケーションを取る」という状況の日常化は、異なる母語を持つ者同士が英語を共通語として学びつつも、そうしたプ

⁴ もちろん、英語のほうが都合のよい場合には英語を用いることもあるし、日本語を用いる場合もある。使用言語については、顔ぶれやテーマなどに応じて状況ごとに適宜選択される。

プログラムの枠にとどまらない他の言語世界へと目を向けるきっかけを、学生に与えているようである（〈図1〉参照）。

〈図1〉「キャンパスアジア・プログラム」における多言語状況のモデル図

